

【視 点】

ドイツで感じたこと

夏休みにドイツとスイスへ家族旅行をしました。ドイツでは、ライプチヒ、アイゼナーハ、ボンそれにフュッセンを訪れました。

ドイツ国内は、主に鉄道で移動しました。日本でいわゆる～本線と呼ばれている幹線鉄道だけで、地下鉄には乗っていません。この鉄道がユニークなのです。

まず、駅には改札口がありません。普通は、窓口で切符を買うのですが、私達は、事前に、どの区間でも乗れるパス（一ヵ月間有効）を買っていましたので、いきなり列車に乗り込むことが出来ました。乗ってしばらくすると、車掌が切符を見に来ます。これだけなのです。キセル等は、簡単に出来そうです。日本でこうしたシステムを取り入れたとすれば、不正乗車だらけになってしまうのではないのでしょうか。自動改札機で一分の隙もなく乗客をチェックする日本とドイツとでは、乗客に対する信頼感がまるで違うように思われます。

次に、ドアの開閉です。ドイツの列車のドアは、自動式ではありません。乗る時も降りる時も、自分でドアをスライドさせるなり、ハンドルを回す等して乗客（降客）が開け閉めします。しかも列車毎に開閉のシステムが異なっているので、面食らってしまいます。これは、日本の方が遥かに便利だと思いました。

プラットフォームでも列車内でも放送は、極僅かで列車の出入、駅への到着を知らせるだけです。日本のあのサービス過剰と言っても良い程の喧騒とは全く違う静かな雰囲気でした。

総じて言えば、鉄道の旅は、快適なものでした。同じ鉄道でも日本とドイツで何故これ程違うのでしょうか。

鉄道も含めインフラストラクチャーは、所詮、鉄とコンクリートで出来た無機物に過ぎません。問題は、これを利用する我々人間側にあると言えるでしょう。私達は、通勤途上でこれでもかという程のストレスに曝されています。街頭の雑踏に飲み込まれてしまいそうなのに、人と人との関係は、却って疎遠になっています。ストレスで一杯になっている私達は、自らを急かし、ゆとりのない行動へと駆り立てているのです。こうした私達が使っている鉄道が日本の鉄道なのです。

旅行をしていて気が付いたのは、ドイツ人がゆったりと生活しているように見えたことでした。テラスでのんびりと食事をしている人々。こうした生き方をしているのは、ラテン系の国民であると思っていたのですが。

(次頁に続く)

どれ程インフラストラクチャーが整備されたとしても、私達の「生き方」が変わらない限り、満ち足りた感に浸れることはないでしょう。問題は、私達の生き方に関わっていると思います。

(財) 土地総合研究所 理事調査部長
山邊俊明